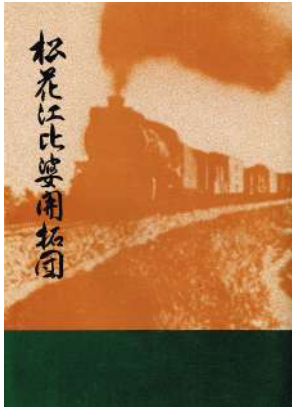


県北 どらくろあ

第59号 2021年2月1日（毎月1日発行）



ふるさとの開拓者②

「松花江比婆開拓団」前編

（小田研一・永岡亀太郎共著、昭和六〇年発行）

開拓の場所は国内だけではない。国策としての開拓事業に賛同して、見知らぬ海外に渡った人たちがいる。かつて中国北東部に存在した満州国もその一つ。日本の傀儡国家としての満州国が建国された昭和七年から集団移民が断行され、それは戦争の終わった昭和二〇年の第十四次まで続けられた。参加した開拓者は、満蒙開拓青少年義勇軍等を含めて、合計三二万人に及んでいたという。

拓団の副代表、永岡亀太郎氏は比婆開拓団の警備指導員を担っていた。

松花江は中国東北部を流れる大河で、アムール川最大の支流である。入植した当時の吉林省徳惠県第二松花江地域の開拓計画は、水田三千町歩、畑五千町歩、宅地五百町歩、共同利用地四千五十町歩、公

共用地四百五十町歩の合計一万三千町歩（約130平方キロメートル）の開拓を行うというもの。広大な原野である。「松花江比婆開拓団」には、資料として県内の郡市（当時の旧郡市）別満州移民数の一覧表が掲載されている。人口に対する移民の割合が高い順に列記してあるが、世羅郡、芦品郡、山県郡、高田郡、比婆郡、双三郡の順番で、やはり県北部の比重は大きいようだ。

までに比和町内から五七世帯（一九一人）の応募者があり、それに近隣三カ町村からの参加者及び保健・教育・畜産等の特別用務者を加えて総数七二世帯（二四一人）の集団が組織された。

翌一九一九年一月には先遣隊が現地に向かい、二月頃から順次家族や団員が入植。四月には広島県より入植した常金丸（内田正雄団長）、比婆（小田研一団長）、西城（藤沢熊登団長）、佐伯（林谷稔団長）、高田（佐々木勝一団長）の五コ団で第十三次松花江総合開拓団を結成、中央の西城開拓団

郡市別・満州移民数

郡市名	開拓民数	義勇隊員数	計	昭和15年の人口(千人)	出移民率%
世羅	619	191	⑤ 810	36	2.27
芦品	1,094	231	① 1,325	64	2.07
山県	684	150	③ 834	48	1.73
高田	433	199	⑦ 632	55	1.16
比婆	538	185	⑥ 723	69	1.05
双三	199	322	⑩ 521	60	0.87
安佐	353	164	517	62	0.83
深安	172	219	391	47	0.82
甲奴	54	86	140	18	0.79
佐伯	582	243	④ 825	109	0.76
神石	75	107	182	26	0.69
御調	394	230	⑧ 624	90	0.69
豊田	271	256	⑨ 527	113	0.47
福山	153	90	243	59	0.41
沼隈	83	279	362	90	0.40
賀茂	172	255	427	129	0.33
尾道	93	44	137	57	0.24
広島	684	247	② 931	408	0.23
安芸	119	150	269	125	0.22
三原	21	29	50	42	0.12
呉	39	163	202	273	0.07
小計	6,832	3,840	10,672	1,981	0.54
その他	424	51	475		
合計	7,256	3,891	11,147	1,981	0.54

に本部を置き、総合開拓団長に藤沢熊登、副団長に小田研一が選任された。

比婆団は比和町を主体としているので、西城町も含まれていると誤解されやすいと、比和団と改称するように要求されたが、高野や東城等の町村からも参加者がいるため改名しなかつたという経緯が

ある。各開拓団は相互に連絡協調しながら、それぞれ独自の経営を進めることになる。

「通例的には入植後一〜三年間は共同経営方式をとっているが、比婆団では団を六部落に分割し、部落毎に部落長、副部落長を任命し、各戸はできるだけ早期に個人経営に移行することを目標とした。」(『松花江比婆開拓団』より)

各戸毎に競って農耕に励んだこともあって、一年目は豊作だったという。

七月の雨期の洪水のことが書かれている。堤防工事中の仮設樋門から大量の濁水があふれ出た。

「さいわいに、西城・比婆・佐伯の各団員と中国人とが協力し、高粱(こりやん)殻と土砂とで防水し災害をまぬがれることができた。中国人も開拓団員の勇敢な行動を称賛していた。」(『松花江比婆開拓団』)

しかし、中国人の居住している桃家関(ヨウジャカン)部落は堤防の外にあるので、洪水で畑の穀物が全滅。それでも、満州国政府からは供出達成を催促され困窮していたので、その分を比婆団が代替えたという。

第一部の「開拓団長覚書」での小田研一氏の手記を読むと、先住の中国人との関係は良好だったようであるが、第二部の「鍬の戦士の想い出」での永岡亀太郎氏の手記を読むと、「占領地」の複雑な事情がうかがわれる。

「住居は、取りあえず原住民の立ち退いた房子(家屋)を集団で利用することとし、比較的規模の大きい黒魚泡は団本部とした。これらの家屋は全て強制的に接収されたもので、黒魚泡は元屯長の姜王栄氏の持ち家であった。」(『松花江比婆開拓団』)

抑えつけられた反感が、日本の敗戦で噴出することになる。これは後編で紹介する予定。

小田研一氏は帰国後、昭和二九年秋から三期十二年、比和町長として活躍する。本誌でも紹介した児童書『ホタルとぶ』(沖井千代子著)では、「花川町長」として登場する。稲を食い荒らす害虫「まいまいが」が来襲したとき、地元の医師や昆虫の専門家の意見をきいて、当時は当たり前だった農薬の空中散布を拒絶、県の補助金も断る。

周辺の町村からは冷笑されたが、まいまいがの天敵の昆虫がまいまいがを撃退、被害を食い止めた。花川町長は、単価の高い酒米を作ること、無農薬による収穫の減量を補うことを推進する。比和町は現在、酒米の名産地になっている。

『ホタルとぶ』には、比婆開拓団のことも詳しく書かれている。そのときの体験が物語の重要な背景になっている。『松花江比婆開拓団』と共に、一緒に読んでほしい本である。

ふるさと掌編昔話②

「明礬と今晚」

むかし。

むかし、ばかなむすこがおった。ばかで、ものおぼえの悪いむすこに父親が、

「明礬買ってもどれ」

言うたら、むすこは、

「はい」

言うて、すぐ駆け行って行ったのはええが、もともと頭が悪いもんじゃけえ、明礬を売る家へ行っての、

「あの、今晚下さい。今晚下さい」

言うたら、

「今晚はありやあせん」

言うて、とうとう売ってくれざったいうて。へえからもどつて、

「なして(なぜ)買って戻らんだったか」言うたら、

「今晚くれえ言うたら、くれてえなかつたけえの、へえでわしあ買

うて戻らだつた」

いうて親に言うたら、へえたら、

「つまらんげなあ(役に立たない)。明礬じゃいうて、わしが言うた

じゃなあか」

へえじゃが、ばかむすこが、

くやしそうに、

「やれやれ、なさけなや。たつたひと晩ども間違うての、売ってくれりやあええのにのう。薄情なお

じいさんじゃ」

いうての、ばかむすこがくやしがつたいうて。

ばかでも、あがあな(あんな)とんちがあるいう話よ。

(三次市向江田町で採録)

「採訪記録ひろしまの民話(昔話編)」(中国放送編集)より転載。

※ミヨウバンは根菜、芋、栗等のアク抜きその他、多用途で使用されている。



虫と草木と人びとと④7 中村慎吾

比婆山連峰の自然(2)

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

国の天然記念物に指定されている「比婆山のブナ純林」以外では、立烏帽子山と竜王山間の北斜面の標高



吾妻山南斜面、大池から南ノ原へ向う途中のブナ林(1975年8月撮影)

850m以上のところにブナ林がある。ここは保護されているので、現状は維持されている。しかし、吾妻山南斜面のごく一部にブナ林が残っていた。しかし、ここはキャンプ地として開発され、休暇村吾妻山ロτζから大池への一部などにわずか残っているだけで、その多くは失われている。以前の写真からわかるように、高木層をブナが占め、低木層をクロモジ・タンナワサフタギなどが占め、階層構造となっている。

なお、比婆山連峰の西、猿政山をへだてて聳える大万木山(標高1218m)は、山頂に残るブナ林もブナークロモジ群集にふくまれるが、比婆山連峰のブナークロモジ群集は、マルバユフイチゴで標徴されるところから「マルバユフイチゴ亜群集」に、大万木山のブナークロモジ群集は、オオイワカガミで標徴されているところから「オオイワカガミ亜群集」

にそれぞれ区分されている。比婆山連峰の中で特筆に値するのは吾妻山のサワグルミの溪畔林であろう。

吾妻山のサワグルミ林は、キャンプ場を過ぎて標高1080mの等高線沿いに設けられ、南ノ原への歩道約500mの南西斜面、標高970mの高さのところを走る市道吾妻山―池ノ原線との間に広がっている。このサワグルミ林はトチノキの巨樹が混じるトチノキ・サワグルミ林で、ブナクラス域の渓谷沿いに発達する湿性林のひとつ裏日本型の湿性林である(宮脇、1982)。このトチノキ・サワグルミ林は市道吾妻山―池ノ原線で分断されるが、市道吾妻山―池ノ原線の下方は、井尻谷の標高750mのところまで拡がっている。このトチノキ・サワグルミ林は、中越・他(1989)によって「サワグルミ―ジユウモンジンダ群集」とされ

ている。

南ノ原への歩道を進み、溪谷へ進んだ最初あたりの林床は、ジユウモンジンダが僅かで、クロモジが多い(次頁の写真参照)。やがて溪谷部へと入ると、リョウモンシダが林床を覆い、そして、ジユウモンジンダとサカゲイノデが混じり、ミヤマイラクサも混じる。中越・他(1989)は、サワグルミ―ジユウモンジンダ群集としているが、むしろ、サワグルミ―リョウモンシダ群集とした方が妥当であると考えられる。また、溪谷の畦畔部に当たる斜面には数本のトチノキの大木があるが、特に南ノ原へ近い歩道の登り坂附近に1本のトチノキの巨樹がある。比婆山、立烏帽子山、竜王山の北斜面にもサワグルミが自生しているが、吾妻山のように「サワグルミ―ジユウモンジンダ群集」として植生上、区分できるところはない。

ブナ林が皆伐された跡地で、植林されなかった標高700m以上のところは、クリ・ミズナラ・イヌシデ・イタヤカエデ・ウリハダカエデ・リョウブなどの落葉広葉樹から成る二次林へと遷移している。この二次林は、中越・他(1989)によって「ミズナラ・クリ群集」とされている。ミズナラ・クリ群集はブナクラス域の落葉広葉樹二次林であることはいうまでもない。標高700m以下のところは、ヤブツバキ域の落葉広葉



吾妻山のサワグルミ林
(吾妻山植物誌2018による)

樹二次林である「コナラーアベマキ群集」で、これは比婆山連峰内では限られたわずかな地域に見られる。

比婆山連峰からは、吾妻山で山下(1977)と田丸(1977)が合計592種の維管束植物を記録し、竜王山、立烏帽子山、池ノ段、比婆山、烏帽子山などで関(1972)は417種を記録している。2015年〜2017年に実施した吾妻山植物調査の結果、吾妻山から広島県初記録のエゾノフユワラビ、ウスゲミヤマシケシダ、イヌイワイタチシダ、オオカワズスゲ、ツルギハナウドをふくむ861種が確認されている。竜王山、立烏帽子山、池ノ段、比婆山、烏帽子山の植物調査は2018年4月に始まり、2019年10月末で終わるので、詳細は不明であるが、すでに関(1972)が記録した417種をはるかに上まわる維管束植物を採集している。

ヒバキンポウゲ *Ranunculus bibanontanus* Kadota は、池ノ段で採集された標本に基づき2012年に新種として記載された植物で、2019年現在、池ノ段に自生しており、吾妻山の山頂付近でも確認されている。

「つれづれ歌談」⑧

松岡初枝

二月三日は立春です。とは言え、寒さの中、あたたかい家族の情愛を詠んだ歌が心に染みる頃でもあります。

・憶良らは今は罷(まか)らむ子泣くらむそれその母も我を待つらむそ

・白金も黄金(くがね)も玉も何せむに優(まさ)れる宝子にしかめやも (二首山上憶良)

憶良は家族愛や貧しい人達への共感を多く歌に詠んだ人です。何も説明の必要がない、すんなりと心に染みる歌は現代にも通じます。

・たのしみはまれに魚烹(に)て児等(こら)皆がうましましと

言ひて食ふ時

(橘曙覧、たちばなのあけみ)

この曙覧の歌は、昭和の時代、卓袱台を囲んでワイワイと賑やかに食べた食卓を連想させ、思わずニコツとしてしまいます。

・父母(ちちはは)が頭(かしら)かき撫で幸(さ)くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる

(相模の国防人)

「無事で帰って来いよ」と送り出してくれた両親のことを思うと忘れられない。この防人はおよそ三年の任期を無事に終え、帰郷できたのでしょうか。どれも家族の愛に溢れた歌です。

・白き骨を拾ふ箸先にカサカサと父のいのちの終(つひ)の音する
・あぶら臭く古き口紅ぼつねんと抽斗にあり母の鏡台

(二首松岡初枝)

私の父母は十年以上も前に他界しましたが、それぞれを送った後に詠んだ歌です。今読み返してみると、親子として過ごした日々を思い出します。

互いに思い合う心はいつの世も一緒、長く寒い冬の夜、一首詠んでみませんか。

一月の寒気に、ブルッと背筋を震わせた。

(温かいもんでも飲むか)

茶封筒を逆さにして手のひらで受けると、百円玉が一つに十円玉が三つ、落ちてきた。

自動販売機を物色した。百円のものを探してしまう。封筒の中の三万四千百三十円、これが最後の給料なのだ。政府の緊急事態宣言での飲食店の営業時間短縮要請で、働いていた居酒屋が夜の八時で店じまい。時給の高い遅番のシフトだったおれは首を切られた。

先客がいた。いや、客ではなかった。つり銭の返却口に指を突っ込んでカチャカチャと音を立てた。視線は自販機の置かれた地面を舐めている。

(明日は我が身か)

垢でテカったジャンパーの背中を見送りながら、百円硬貨を投入した。いつもブラックコーヒーなのだが、カフェオーレを選んでしまう。今日はまだ夕飯を食べていない。あのバイトは、賄い飯が魅力だったのだが……。

ボタンを押す前に、ガシャンという音がした。黒いコートを身にまとった男が立っていた。顔半分を覆

う黒いマスクにサングラス、コロナ禍であっても怪しい風体である。ヤクの売人？

男が返却口に指を突っ込んで、戻ってきた“おれの”百円玉を取り出した。

(この野郎！)

男がニヤリと笑った……、ように見えた。アゴをしゃくって背中を見せた。百円玉をつまんだ指を差し上

返そうと手を伸ばした瞬間、男は掌を握ると、もう片方の手で包み込んで、シャッフルするように両手を振った。そして、あらためて握った右手を差し出すと、ゆっくりと指を開いた。

おれはアツと声を上げた。百円玉があったはずの掌に、マッチ箱が載っていた。

「マッチを買ってくれませんか？」

りどもってしまい、セリフの多い役がもらえないままくすぶっていた。「おれ、青森に行くことになったから」

いきなりの宣言だった。「うちのかみさんがコレでね」

両手でふくらんだおなかを描いた。「蒲田行進曲」のヤスの物まねだ。「結婚してたんですか？」

「できちゃった結婚だよ。この前、彼女の実家に挨拶に行った。みんな津軽弁……、まあズーズー弁なんだが、これがなんだか心地よくてね。どもるくらいなんでもないような気がしてくるんだ」

老舗の温泉宿なのだという。「かみさんや子供を養っていく甲斐性はないからな。婿に入るというと向こうの親も大喜びさ」

喜んでる口調ではなかった。「おまえの方は、まだ、役者、やってるのか？」

ええ、まあ、と、言葉を濁すしかなかった。エキストラの役からも、こしはばらくはあぶれている。「がんばればおれにもできる、そう思ってたさ」

タバコの火種が赤々と燃えた。嘆息するように、大きく煙りを吐き出した。

燐寸

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑤3

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

げて、これ見よがしに振って見せた。

自暴自棄にもなっていたのだろう。

危険を感じながらも黒い背中を追いかけた。男は速足で、繁華街の中を歩いて行く。見失わないようにするので精いっぱいだった。いつの間にか小さな路地に入っていて、突き当たりの薄暗い場所にいた。

男が振り向いた。百円玉を載せた掌(てのひら)を差し出した。取り



「諦めなければ夢は実現する……、
 そう本にも書いてあったもんな」
 怒りがこもっている。

「当たり前だよな。成功したもんしか本を出せないもの。負け犬の言葉なんか、誰も聞きたいとは思わない」
 短くなったタバコをパクンとくわえ込んだ。ゴクンと喉を鳴らして口を開けるとタバコが消えている。オエツとえづいて顔を上げると、再び火種のついたタバコをくわえていた。マジシャンとしての技術は一流なのだ。どれだけ努力を重ねたのだろう。

「余計な愚痴をこぼしちゃったな」

タバコ一本だけの送別会が終わった。おれの手の中に、マッチ箱が残された。デフォルメされた緑の山波が描かれている。マウンティンというロゴ、故郷にある喫茶店の名前だった。

いつ手渡したのかも忘れてしまったが、大事に使ってくれていたようだ。箱をスライドすると、百円玉が入っていた。残っているマッチは一本だけ。箱の側面でマッチを擦った。隣の燃える臭気が漂ってくる。二十年以上も前のマッチの炎をじっと眺めていた。

コージのチャリンコにふたり乗りにして、よく高校を抜け出した。マウンティンの奥のボックス席で、タバコをふかしてだべっていた。酒もタバコも、コージが教えてくれた。まるで戦利品のように、マウンティンのマッチを持って帰った。

「おれと一緒に、東京に行こうぜ」
 卒業式のあと、マウンティンに来ていた。

「うちはおやじがおらんけえの。今日でヤンチャも卒業じゃ」

コージの顔が大人びて見えた。炎が消える寸前に、携帯電話が鳴り始めた。コージだった。

「よお、勤労者、元気で働いてるか？」
 笑い声が響いた。おれは、寅さんの物まねが得意だった。

「年賀状が戻ってきたんでな。大丈夫か？」

「タワマンに引越したよ」

家賃が払えなくて夜逃げして、友達のアパートに転がり込んだ。

「元気そうじゃの」

「カラ元気だ。おまえの方はどうなんだ？」

「ボチボチだな」

仕事の愚痴は話さない。工務店に勤めて、今は棟梁になっている。三人の子供がいた。

「ど田舎は、相変わらず人は減っているのか」

寅さんの物まねだったが、笑いはなかった。人口減少に歯止めがかからず、過疎の問題は深刻だ。

「四十過ぎのなんの取柄もないオッサンが帰っても、役に立てそうか」

本音がこぼれ出た。

「まだまだ若手で、じいさん連中にばりいこき使われるさ。戻って来いよ。人が余っているところにおってもしようがねえぞ」

返事ができない。

「帰って来い！」

何度も頷いていた。

まつの古本屋さん どの書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 15,000円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「自動車絶望工場」

鎌田慧 著 徳間書店

ある季節工の日記、の副題。1972年9月12日から日記はスタートする。6か月の短期契約。トヨタ王国の愛知県豊田市の本社工場に配属される。ベルトコンベアに隷属する苛酷な作業が待っていた。三交代制の不規則勤務で疲労困憊して寮と工場を往復するだけの毎日、退職者続出で、補充した見習工もその日のうちに逃げ出す者もいた。一緒に入った37人のうち、期間を全うしたのは著者を含めて二人だけだった。



会社御用達の組合で社員の不満をガス抜きして、病気や事故も隠蔽、底辺の労働者が高度経済成長を支えていた。潜入ルポの先駆けで、日本の企業の近代化に果たした役割は小さくないと思う。

「日本人漂流物語」

室賀信夫 著 新学社文庫

漂流や遭難の物語が好きだ。過酷な運命に翻弄されながらも、機転を利かせて困難な状況を切り抜ける。何より、タフな精神力が必要だ。「孫太郎ボルネオ物語」「光太夫ロシア物語」「韃靼漂流物語」、3つの物語が掲載されている。

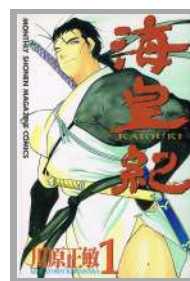
孫太郎は筑前（福岡県）の水夫で、南方の珍奇な動植物や風俗が紹介されている。光太夫の物語は井上靖の「おろしあ国酔夢譚」となった。韃靼は満州のことで、清時代の中国のことが書かれている。みんな実在の出来事で、江戸時代に記録として残っている。いずれも望郷の執念が帰国を実現させたが、今の日本人に愛国の想いはあるのだろうか……。



「海皇紀」

川原正敏 著 講談社

コロナ禍での閉塞感をいくらかでも癒してくれた漫画。海の一族の影船八番鑑の艦長、ファン・ガンマ・ビゼンが主役。群雄割拠する戦国時代で、中世が舞台だと思っていたら、今の世の中が滅んだ未来を描いていた。古代の魔法である「カガク」の兵器を使うロナルディア軍に、智謀を駆使して立ち向かう。武力や胆力だけではなく、三国志の諸葛孔明や周瑜を連想させる戦略合戦が魅力。最後に読み勝ったのは……。



1998年から2010年まで月刊少年マガジンに連載、全45巻。商船高専の生徒だった作者が描く帆船はリアルで迫力がある。“絵空事”は、専門知識が土台で本物以上になる、と実感した。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

着ぶくれて八歳下のつま老いず

近藤 昌平

雪晴れや足跡崩れ始めけり

富久光

初風や光を返す瀬戸の海

片岡 正人

ぱんやりと雪のばあさんとうごいえせー

隆愚

雪だるまスマホに写す都会つ子

大槇 三代子

大寒や休み憩^{やす}みの古時計

赤川 冬人

関東のからっ風吹く新年も

松岡 初枝

有難く思ふ山は大雪

「祖母の思い出」
隆愚



投稿&寄稿

候のことば

「東風^{こち}」

隆愚

う？ それはもともと七十二候が中国から渡ってきた暦であることの名残です。中国で親しまれる陰陽五行の思想で、春は東を司るから東風と呼ぶそうです。

東風吹くや耳現はるるうなる髪

杉田 久女

東風とは、春風のこと。でも春風というのは南から吹く暖かい風のはずなのに、なぜ東風と呼ぶのでしょう

※うなる髪は、幼い子のうなじあたりで束ねた髪

「祖母の思い出」

隆愚

今回の私の句のぱんやりは、ちよつと大きめの雪がゆつくりと落ちてくるさま。明治初期生まれの私の祖母が、ゆつくりと雪が降っている夕暮れに、孫(私の妹)を背負って、日稼ぎに行つてまだ帰つて来ない孫の母(嫁)を待ちながら、歌つていた子守唄に「雪のばあさん、とうごいえーせー、まんだもちゅう、ついでない」というのがありました。「とうごいえーせー」の「とう」は、疾(はや)くの意味です。「ごいえーせー」は御座れの意味で、おいでなさいとか、帰つてきなさいになります。「雪の降っている中のお母さん早く帰つてきなさい未だ餅を搗いてないよ、帰つて来たなら餅を搗きましよう。」そんな意味の子守唄にヒントを得て、句を作りました。



地に低く幸せありと福寿草

保坂 伸秋

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

2月9日の「九日市」中止について

寒中お見舞い申し上げます。

「しょうばらくんちいち」の復活以来、20年間にわたりご協力をいただいております皆様に厚くお礼申し上げます。

12月、1月と「九日市」の中止で、ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

現在、広島県の第二次新型コロナウイルス感染拡大集中対策の期間中でありまして、「九日市」の開催を自粛せざるを得ない状況です。運営会議の結果、2月9日の「九日市」も中止する事に決定致しました。

早く開催できる事を望みながら、中止のお知らせをさせていただきます。

今後ともよろしくお祈りいたします。

令和3年2月 九日市愛好会

東日本大震災復興祈願法要

Mebius LIVE

日時：2月28日(日)

場所：萬福寺(庄原市是松町227)

TEL：0824-72-0292

※入場無料(会場に募金箱を設置しています)

- スケジュール -

12:00 チーズ「ふくふく牧場」

喫茶「萬福寺」

14:00 坐禅と法要

15:00 Mebius LIVE

- ・入場時にマスク着用、手の消毒&検温を実施。
- ・コロナ感染拡大の場合は中止します。



Mebius(プロフィール)：

広島県出身の姉妹デュオ。2008年メジャーデビュー。カープの菊池涼介選手の登場曲「#33」でもおなじみ。

編集後記

◇近年にない寒波で外の水道管が破裂、二日間水道が使えず、ささやかな「被災者」体験。トイレがいちばん大変ですね。身体も家も、暖冬に慣れてしまっていたようです。

◇今月の九日市も中止になります。安心して買物が出る日を心待ちにしています。わたし自身、いつも九日市で買い置きしておく食品が切れてしまい、代替品に物足りなさを感じています。

◇毎年二月は店内整理で休業します。在庫整理や棚の増設など、やるべきことが山積、ひたすら作業に没頭する日々が続きそうです。でも、萬福寺の「復興祈願法要ライブ」には行きたいですね。開催できるとを願っています。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン：ROUTE183

協賛：九日市愛好会